日サ協第 120037 号
2012 年 6 月 21 日

関係各位

公益財団法人　日本サッカー協会

国際サッカー連盟（以下、FIFA）から 2012 年 5 月 31 日付け回状 2012 号をもって 2012/13 年の競技規則改正について通達されました。下記のとおり日本語に訳すと共に日本協会の解説を付しましたので、各協会、連盟などで、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるようお願いいたします。

なお、これらの改正等は、国際的には７月１日から有効となりますが、日本協会、各地域/都道府県協会等が主催する試合については、例年どおり 7 月 1 日以降のしかるべき日（遅くとも 8 月中）から施行することとします。

2012/13 年競技規則の改正について

第 126 回国際サッカー評議会（IFAB）年次総会が 2012 年 3 月 3 日にイングランドのサリー州で開催された。この総会において競技規則の改正が承認され、以下のとおり、様々な指示および方向性が示された。

競技規則の改正および評議会の決定

１．第１条　ー　競技のフィールド
競技規則の解釈と審判員のためのガイドライン　―　商業的広告
（FIFA からの提案）

現在の文章	新しい文章
商業的広告は、フィールドの境界線から 1 m（ 1 ヤード）以上離す。	**グラウンド上の**商業的広告は、フィールドの境界線から１ m（ 1 ヤード）以上離す。 立型の広告は、少なくても： **・フィールドのタッチラインから 1m（１ヤード）** **・ゴールライン側については、ゴールのネットの奥行きと同じ長さ、さらに、** **・ゴールネットからは 1m（1 ヤード）離す。**

理　由

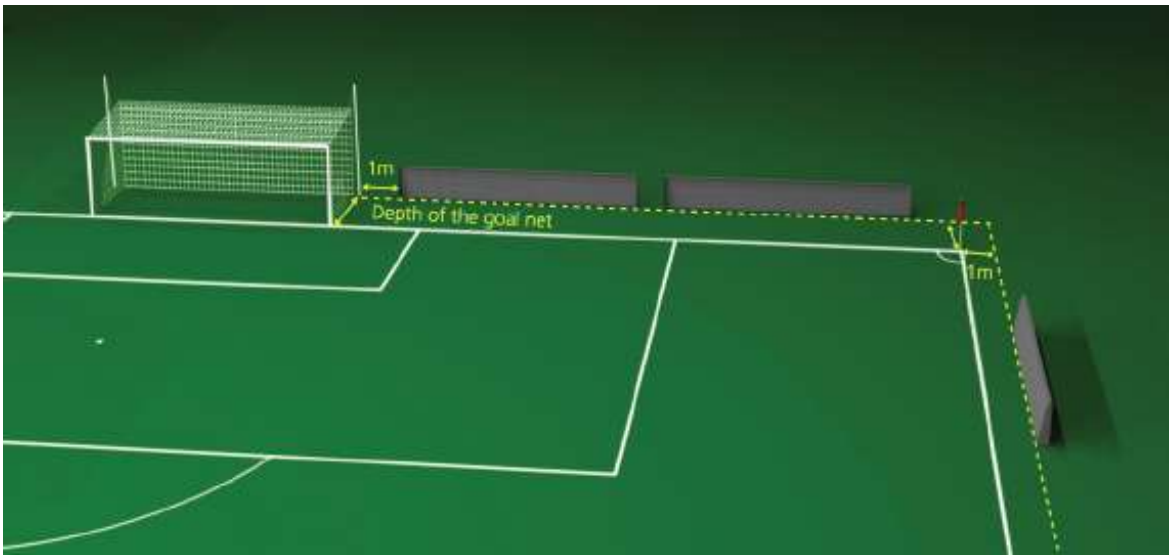
審判員の視野を制限しないよう、ゴールネット周辺１mには立型の広告は置くべきではない。

なお、大改修をしない限りゴール後方に１mの余地が十分取れないようなスタジアムにおいては、施行について考慮することができるとして、この FIFA からの提案は承認された。

＜日本協会の解説＞

グラウンド上の商業的広告は、競技のフィールド（ピッチ）の周辺に設置できる。それが立て型の場合、タッチラインに沿って設置されるものついては、ラインから１ｍと、平面的なものと同じ条件で設置可能である。他方、ゴールライン側については、審判員のゴールネットで囲まれた地域の監視に不都合がないよう、下図のように、ゴールのネットと同じ奥行きまで広げなければならないとした。

なお、平面的なものについては、ゴールライン側であっても、ラインから１ｍ離せば、設置可能であることに変わりはない。



２．第３条　ー　競技者の数

（FIFA およびスコットランド協会からの提案）

現在の文章	新しい文章
	試合開始前に、主審に交代を通知することなく、氏名を登録された競技者に代わって氏名を登録された交代要員がフィールドに入った場合： ・主審は登録された交代要員を続けて試合に参加することを認める。 ・登録された交代要員に対して懲戒の罰則を与えない。 ・問題を起こしたチームの交代の回数は減らさない。 ・主審は関係機関にこの事実について報告する。

理　由

　ウォーミングアップ中の負傷に起因することが多いが、競技者と交代要員の氏名が主審に通知された後の試合の始まる前に交代が行われるのは珍しいことではない。交代が主審に通知されるならば、これは認められる。しかしながら、交代について通知されなった場合についての進め方について、明確にしておく必要がある。

＜日本協会の解説＞

　“氏名を登録された競技者、交代要員”とは、いわゆるメンバー表に記載された競技者、交代要員のことを示す。

　2006年までは競技規則とともに「競技規則に関する質問と回答（Questions & Answers)」が発行されていた。そこには、“登録された交代要員が試合前に主審に通知することなく、味方競技者と交代し試合に参加していた場合、主審はその事実に気づいた時点でプレーを停止し、主審の承認を得ずにフィールドに入ったことによりその交代要員を警告する。交代の手続きを正しく完了させるため、その交代要員にフィールドを離れるように指示する。プレーが停止されたときにボールがあった地点で、間接フリーキックにより試合を再開する。“とされていた。

　今回の改正により、ただ主審に交代の通知を行わなかっただけで、事実として交代がなされていたことを認め、競技者を交代させることなく、試合をそのまま進めることとなった。

　もっとも、主審に伝えなかったことは違反であることに変わりはなく、主審はその事実について審判報告書をもって関係機関に報告しなければならない。そして、関係機関はその重大さに応じて、チームに対して罰則等を与えることになる。

　また、この交代は試合前に行われたものであるので、交代の数としてカウントせず。試合における交代の数は最大3人のまま変わらない。

　なお、チームは交代があれば必ず主審に通知し、また審判団も試合前に登録された競技者名と番号のチェックをしっかり行うようにし、未然にこのような事態が発生しないようにしなければならないことは言うまでもない。

３．第４条　－　競技者の用具

（“イングランド”協会からの提案）

現在の文章	新しい文章
ストッキング	ストッキング　－　**テープまたは同様な材質のものを外部に着用する場合、着用する部分のストッキングの色と同じものでなければならない。**

理　由

　ソックス（ストッキング）の上にあまりに多くのテープを巻く競技者が増加している。これによって、ソックスの色を複数にしたり、ソックスの色を全く変えてしまったりすることになり、混乱を生じさせる可能性がある。特に副審はボールがアウトオブプレーになる前にどちらの競技者プレーしたのか見極めなければならないことがある。

＜日本協会の解説＞

日本では、既に2011年２月３日付“審1102 - M0026号”: ストッキング上に着用するテープ等の色について」をもって、Jリーグ等の試合において、ストッキング（ソックス）の上にテープやバンテージ、アンクルサポーター等を着用する場合、そのテープ等の色はストッキングと同じものに限ることにしていた。

今回の改正によって、このことが競技規則第4条に規定化されことから、すべてのカテゴリーで適用されることになった。

なお、透明のテープについては、テープ下のストッキングの色が見えることから、着用は可能である。

４．第８条　ー　プレーの開始および再開

（“イングランド”協会からの提案）

現在の文章	**新しい文章**
違反と罰則 次の場合、ボールを再びドロップする。 ・ボールがグラウンドに触れる前に競技者がボールに触れる。 ・ボールがグラウンドに触れたのち、競技者が触れることなくフィールドの外に出る。	違反と罰則 次の場合、ボールを再びドロップする。 ・ボールがグラウンドに触れる前に競技者がボールに触れる。 ・ボールがグラウンドに触れたのち、競技者が触れることなくフィールドの外に出る。 **ボールがゴールに入った場合：** **・ドロップしたボールがけられて直接相手競技者のゴールに入った場合、ゴールキックが与えられる。** **・ドロップしたボールがけられて直接そのチームのゴールに入った場合、相手チームにコーナーキックが与えられる。**

理　由

両チームから競技者が参加しない形でドロップボールが行われた結果、得点が生まれてしまうケースが多くある。このようになった場合であっても、得点を与えなければならないという圧力が主審に浴びせられることになる。また、試合のバランスを取るためにキックオフ後相手の攻撃を止めることなく、得点させるというような見苦しい状況にもなることもある。

＜日本協会の解説＞

重傷の競技者対応のため、ボールがインプレー中に主審がプレーを止め、対応後ドロップボールで試合を再開することがある。その際、フェアプレー精神を考え、攻撃の意図なく一方のチームの競技者のみがドロップボールに参加してボールを相手に返したところ、誤ってそこから直接ボールがゴールに入ってしまうことがある。

そのような場合でも、主審は競技規則上得点を与えざるを得なく、また得点したチームは不本意な得点を取り消そうと相手に得点を与えようとするケースが発生したこともあった。

このような事態に至るのを防ぐため、ドロップボール後にキックしたボールが直接ゴールに入ったときのみに限り、得点は認めないとしたものである。パスやドリブルなどでドロップボール後に相手のゴールに向ってプレーが続き、そこからゴールした場合は得点が認められる。

５．第１２条　－　ファウルと不正行為

競技規則の解釈と審判員のためのガイドライン　－　懲戒の罰則

（スコットランド協会からの提案）

現在の文章	新しい文章
懲戒の罰則 競技者が次のように意図的にボールを手または腕で扱ったとき、反スポーツ的行為で警告されることになる。 ・意図的かつ露骨にボールを手または腕で扱って、相手競技者がボールを受け取るのを阻止する。	懲戒の罰則 競技者が次のように意図的にボールを手または腕で扱ったとき、反スポーツ的行為で警告されることになる。 ・意図的~~かつ露骨~~にボールを手または腕で扱って、相手競技者がボールを受け取るのを阻止する。

理　由

　露骨に行ったという現象より、ハンドの反則を行った結果の影響がどうであるかの方がより重要である。事実、小さなハンドの反則であってもとても大きな影響を与えるものもある。競技規則１１３ページには“露骨”とあるが、その定義づけは難しい。さらに言えば、審判員はそれぞれの国、あるいは大陸で異なった審判を行っているが、特にこれら審判員間においてハンドに関する解釈を統一する必要がある。１１７ページにもハンドの反則で相手競技者がボールを受け取るのを阻止した場合、警告されなければならないとあるが、“露骨”という用語を外したことにより、この解釈が（１１３ページのものと同じになり）より分かりやすいものになる。

その他の IFAB の決定

１． 追加副審（AARs）

（FIFA からの提案）

　2012 年 5 月 31 日までの追加副審に関する実験結果に加え、ＵＥＦＡユーロ 2012 決勝大会での分析をもって、2012 年 7 月 5 日開催のＩＦＡＢ特別会議において結論付けることとなった。

２． ゴールライン・テクノロジー（GLT）

（FIFA からの提案）

　ホーク・アイとゴールレフ/フラウンホーファーの 2 社を第 2 段階の実験に進ませたいとする提案が承認された。

＜日本協会の解説＞

FIFA はゴールの判定を確実にするため、追加副審(AARs)とゴールラインテクノロジー(GLT)の実験を行っている。追加副審についてはＵＥＦＡユーロ 2012 決勝大会の結果をもって最終検討をすることとし、ゴールライン・テクノロジーについては、ホーク・アイとゴールレフ/フラウンホーファーのシステムを第 2 段階の実験で検証することになった。

ホーク・アイは、複数のカメラ映像を電子的に分析しボールがゴールに入ったかどうかを判定するもの。ゴールレフ/フラウンホーファーは、ゴール周辺に磁場を作成し、ボールにチップを埋め込み、ボールがゴールに入った時に磁界の変化を検出するもの。

第 2 段階の実験は、ホーク・アイが 2012 年 5 月 9 日にイングランドのサザンプトンでのセミプロフェッショナルの試合、その後、6 月 2 日ウェンブリーでのイングランド・ベルギーの国際親善試合で、またゴールレフ/フラウンホーファーがデンマークの 1 部リーグの試合後、6 月 2 日コペンハーゲンでのデンマーク・オーストラリア戦で行われている。今後追加副審と同じように 7 月の IFAB 特別会議で検討されることになる。

３．FIFA タスクフォース Football 2014

（FIFA からの提案および 2012 年 10 月 25 日のタスクフォース第 2 回会議における通信機器またはその他の用具の使用に関する議論から）

現在の文章	新しい文章
その他の用具 競技者間、または競技者とテクニカルスタッフとの間の無線通信システムの使用は、認められない。	その他の用具 競技者間、または競技者とテクニカルスタッフとの間の**電子通信**システムの使用は、認められない。

理　由

現在の“無線通信システム”の用語では、先端技術による通信すべてを網羅することができない。

４．バニシングスプレー

（FIFA からの提案）

FIFA は、会議において、南米サッカー連盟が開催した 2011 コパ・アメリカでのバニシングスプレーについて説明された。2011 年 3 月 5 日に、2011 コパ・アメリカ他の大会でボールから 9.15mのラインを引くバニシングスプレーの実験的使用を認め、南米連盟から詳細な報告を受け、2011 年 10 月のＩＦＡＢ会議において、どのような点がうまくいったのか強調された。

主たる目的：

１．ボールと壁との間の 9.15mを描くことによって、現行の規定の間違いなく、的確に施行することになる。

2．位置や距離の設定をより明確にする手続きの時間を少なくすることができる。さらに、バニシングスプレーの使用で守備側競技者が早く壁をつくることによって、試合時間を長くすることができる。
3．バニシングスプレーはフェアプレーにとって欠かせない新しい用具。これによって、壁のセット時に起こる競技者と審判員間のいざこざを回避することができるようになる。
4．市場価格は廉価であることから、プロフェッショナルのみならずアマチュアを含むすべてリーグで入手可能である。

会議においてこのスプレーの使用は認められるべきであるとの賛同は得られたが、スプレー使用を行うかどうかの判断は各メンバー協会に委ねるべきであるとした。

5．第4条　－　競技者の用具

（FIFAからの提案）

ヒジャブの着用については原則承認されたが、7月5日のIFAB特別会議での最終承認前に、FIFA医学委員会に安全性の分析を委ねることとされた。

6．2014 FIFAワールドカップ ブラジルの大会規定　－　予選大会

（FIFAからの提案）

2014 FIFAワールドカップ ブラジル大会の大会規定では、"試合用紙（Match Sheet）には23人の選手（競技者11人、交代要員12人）の記載が可能とした。競技者は最初の11人にて記載し、他の　12人は交代要員として記載すること（大会規程23ページ）"と説明されている。しかしながら、競技規則第３条は、最大7人と規定している（競技規則　17ページ）。

そこで、FIFAとして、現大会規定を遵守しつつ、さかのぼって12人の交代要員を可能にするよう承認を求めた。

➔　これによって、競技規則は、次のように改正されることになる。

現在の文章	新しい文章
公式競技会 FIFA、大陸連盟、または加盟協会の主催下で行われる公式競技会の試合では、いかなる試合でも最大3 人までの交代を行うことができる。 競技会規定には、3 人から最大7 人までの範囲で、登録できる交代要員の数を明記しなければならない。	公式競技会 FIFA、大陸連盟、または加盟協会の主催下で行われる公式競技会の試合では、いかなる試合でも最大3 人までの交代を行うことができる。 競技会規定には、3 人から**最大12 人**までの範囲で、登録できる交代要員の数を明記しなければならない。

理　由

　FIFA は大会規程が 12 人の交代要員を必ず置くとしているものではないと説明としているが、監督としても、試合間隔が近い場合、最大数の競技者を使えることがアドバンテージとなる。例えば、週末、そして翌週の半ばに試合があるとしたら、第 1 試合目後、負傷に関しても、また技術的判断に関しても、どのような問題にも対応しておけるようにしておきたい。またチームとしては、試合終盤における負傷を考え、第 3 のゴールキーパーの準備をしておきたい。さらにいえば、経験ある競技者と更衣室やベンチで一緒になれることから始め、プロフェショナルな環境に浸れることになって、若い競技者にとって、これは本当に大きなアドバンテージであり、また選手育成の要素でもある。

　この提案は承認され、2014 FIFA ワールドカップブラジル大会予選では既に施行されていることが付記された。

施行

　競技規則に関する本年の国際サッカー評議会年次総会の決定は、大陸連盟およびメンバー協会において、2012 年 7 月 1 日から拘束力あるものとなる。しかし、現在のシーズンが 7 月 1 日までに終了しない大陸連盟およびメンバー協会については、今回採用された競技規則の変更導入を次のシーズン開始前まで遅らせてもよい。

国際サッカー連盟　事務局長
ジェローム・ヴァルク

写し送付：　FIFA 理事、FIFA 審判委員会、大陸連盟